

読書通信



No. 214

① 経済倶楽部で私の在任中に宇沢弘文さんに2度ほど講演していただいた。個人的には良い思い出である。宇沢さんが亡くなって8年、佐々木実「今を生きる思想 宇沢弘文」(講談社現代新書、880円)はコンパクトだが内容の濃い良書と思う。何よりまずシカゴ学派との対決から始まり、新古典派経済学への異議申し立て、水俣や三里塚における正義感の発露、「自動車の社会的費用」に象徴される宇沢経済学の全貌など、学問的に筋を通しつつ新境地を切り開いていったその一生が生き生きと語られる。

② 「白衛兵」は紅衛兵のもじりでゼロコロナ下バイウエイゼンに白い防護服の公安が家に入り込み消毒液をまき散らしピアノも家具も使い物にならなくする横暴への批判だ。権力や社会を皮肉る中国人のセンスもなかなかのもので、大いに参考になる。③ 戦時を知る人は少なくなる一方だ。岩川洋成・文、浅生ハルミン・画『さだじいの戦争かた』(論争社、1760円)のさだじいは生きていたら今年90歳になる著者の父親。生前の話カルタと解説で構成した。「もらすな灯。声もひそひそ灯火管制」。電灯の笠を黒い布で巻いた日々。外から「光、漏れてますよ」の声。「すいとんはいものつるが具おなかはグー」少国民文句言うたら「非国民」。ほんとに嫌な時代だった。こんな世に再突入しないためにも、若い世

宇沢さんの「志」がどこにあったのか、あれほど強靱な意志の力が発揮され続けたのはいかにして可能だったのかを知るに最適の書である。城山三郎賞などを受賞した同じ著者の『資本主義と闘った男 宇沢弘文と経済学の世界』を読んだ人も未読の人も、本書によって経済学の地平と人間の生き方を学ぶことができるだろう。

② 同じ版元で恐縮だが、とても良い本なので近藤大介『ふしぎな中国』(講談社現代新書、990円)を。中国で今、はやっている34の新語や流行語を解説しているのだが、いずれもみな面白く、現代中国の諸相を切り裂いて中国理解に好適な教科書である。例えば「社恐」シャウコン。会社が怖いのではなく社交つまり人付き合い恐怖症のこと。なんと中国の若者の6割が該当するとい

代が戦中戦後を知ることとはとても大事と思う。④ 高野秀行『語学の天才まで1億光年』(集英社インターナショナル、1870円)はとても興味深い本である。まず書名が?だ。著者は大学探検部で世界の秘境を訪ね歩こうとする。もちろん現地では現地語を学ばないといけない。謎の怪獣を探しにコンゴとザイルへ出かけて学んだリンガラ語をめぐる第一話からして秀逸に面白い。広い世界と言語に関心のある人には絶対のお薦め本である。で、書名は「自分は語学の天才には遠い」という謙遜の意味らしい。◆ところてついい先日、編集者からこの欄は年内で終わりにすると通告されました。というわけでこれをもって失礼します。長い間お読みいただきありがとうございました。(浅野 純次)